

自然誌 だより

Natural history

秋

三重自然誌の会情報誌 122 号

2019年 12月

セイタカシギが八重田池に現る

八重田池（松阪市八重田町）周辺の生きものについては、これまでも何度か紹介してきましたが、マガモが撃たれたはなしや外来種のアカミミガメが増えたなど、あまり明るい話題ではなかったように思います。今回はグッドニュース、セイタカシギがやってきたのです。今年の10月28日午後1時過ぎに、事務所の窓から見慣れない1羽の鳥が池辺にいるのが見えました。そばでクサガメが甲羅干しをしていましたので、暖かい日だったのでしょう。とりあえず写真に撮ってから図鑑で調べると本種であることがわかりました。セイタカシギは、写真のようにピンク色の細い足に丸い頭がのったスマートな姿のシギで、国内には旅鳥として渡来しますが、一部は繁殖もするそうです。県レッドデータブック2015をみると、松阪市内でも1例繁殖記録がありますが、生息環境である湿地の環境が太陽光発電の設置などにより悪化していることから、もっとも絶滅の可能性が高い「絶滅危惧ⅠA類」に選定されています。本会の今堀聖史さんによると、松阪市曾原町の海岸付近には比較的多く渡来していたようですが、そこにもメガソーラーができ、池面を太陽光パネルがおおっています。このセイタカシギは、そこを追い出されて7～8km離れた八重田池にきたのかもしれませんが、気に入らなかったようで翌日にはいませんでした。



写真 セイタカシギ（2019年10月28日，松阪市八重田町）

（清水善吉：松阪市日丘町1386-17）

ムラサキガイを食す

篠 木 善 重

近年、津市や松阪市の海岸でハマグリが採れるとの評判を聞く。そんな折しも知人に誘われて、大潮の9月下旬に松阪市の五主海岸へ潮干狩りに出かけた。日曜日とあって、人出が多く、海岸堤防は車で埋まっていたので雲出川右岸堤防に駐車した。持ち物は安物の鎌とバケツ。鎌でハマグリを探す。大きなハマグリに当たると、大きな音がする。近くにいる人にも聞こえるので、「おっ、大きそうですね」と声をかけられる。ハマグリは20個以上採れた。他にシオフキとムラサキガイも採れた(写真1)。ムラサキガイの殻は薄くもろいので、3個採れたものの2個は殻が粉々に砕けたので放棄した。近くにいた人のバケツの中にもムラサキガイが3個入っていて、「この貝は食べられますか」と尋ねられたので、「ええ、食べられますよ」と知ったかぶりして即答した。しかし、実はこれまで一度も食べたことはなかった。

食べる前にネット検索して、本当に食べて大丈夫なのか調べてみたが、情報がほとんどなかった。ただ、木村・山下(2012; 干潟の絶滅危惧動物図鑑—海岸ベントスのレッドデータブック, 東海大学

出版会)が山口県、大分県の一部では食用にしていると記している。とにかく焼き蛤が食べてみたかったので、ハマグリと一緒にフライパンに入れて、蓋をして焼いた。貝が開いてから少量の酒を垂らして出来上がり(写真2)。自家栽培の青いレモンの汁をかけた。固くもなく、柔らか過ぎることもなく、実入りもよく上品な味で、余すところなく平らげた。

ムラサキガイは、本誌102号において中野(2014)が伊勢湾内での個体数増加傾向を示唆している。みえ生物誌—貝類(中野・中2018; 三重自然誌の会)によると、津市河芸町から鳥羽市にかけての海岸で得られた標本が確認されており、松阪市五主町では2011年に得られた標本があるという。本種の学名については、中野・中(同上)が *Soletellina diphos* とし、木村・山下(同上)、中野(同上)や中野(2015; 三重県総合博物館研究紀要, No.1)は *Soletellina adamsii* としているが、ここでは本会刊行物に従った。

皆さんもムラサキガイの成貝を見つけたら、ぜひ一度はご賞味ください。

記録

マルスダレガイ目シオサザナミ科 ムラサキガイ *Soletellina diphos* (Linnaeus): 松阪市五主町五主海岸, 1個体(殻長102mm), 29-IX. 2019, 筆者採集。



写真1 ムラサキガイ、ハマグリ、シオフキ。2019年9月29日、五主海岸産



写真2 調理後のムラサキガイ

(しのぎ よししげ: 津市河芸町中別保2230-1)

松阪市四郷池湿地管理の状況(1) ～表土剥ぎの有効性～

谷 口 雅 仁

松阪農業公園ベルファーム内にある四郷池の湿地管理を始めて5年目となりました。管理を始めた経緯などは本誌107号をご参照頂ければと思いますが、これまでいろいろ試行錯誤しながら管理を続けてきた中で気付いたことなどを何回かに分けて報告していきたいと思います。

まず、初回は「表土剥ぎ」の有効性についてです。湿地の保全に表土剥ぎが有効なことについては、鈴鹿青少年の森の湿地保全活動に参加した時に教えて頂きました。四郷池の湿地も乾燥化が進んでおり、笹がびっしりと生えてきているような状況でしたので、早速2017年2月16日試験的に2箇所ほどで表土剥ぎをやってみました(写真1)。1m四方で10cmほどの表土を剥いただけですが、笹の根がびっしりと張っているため結構な重労働になります。これを10mほど離れた2か所で実施しました。

写真2は、その年の5月26日の状況ですが、特に湿地の植物が復活してきたという状況には見えませんでした。笹の根もしっかり残っています。しかし、秋にはトウカイコモウセンゴケらしきものが1か所で1株生えているのが確認できました。写真3は、翌2018年6月1日の状況です。ヘビイチゴなど植物は増えてきましたが、この時点ではモウセンゴケの仲間などは確認できませんでした。しかし、この年の秋には2箇所ですれぞれ10株ほどのトウカイコモウセンゴケらしきものが生えているのが確認できました。そして、それらの種が発芽したのか、2019年6月1日には多数のトウカイコモウセンゴケらしきものが花を咲かせているのが確認できました(写真4、5)。

さらに嬉しい発見があったのは、1箇所でイシモチソウが2株ほど生えているのが確認できたことです(写真6)。これは、数株ほど残っているイシモチソウの種(らしきもの)を前年に蒔いておいたものが発芽したのではないかと思います。表土剥ぎの有効性が実感できるものでした。

有効性が確認できたので、表土剥ぎについてはさらに面積を増やしていきたいと思っています。重労働になりますが、お手伝いいただける方がみえましたらお知らせください。

※ e-mail : gajin @ mctv.ne.jp TEL : 090-8556-9801



写真1 表土剥ぎの状況



写真2 写真1の3ヶ月後



写真3 写真1の15ヶ月後



写真4 トウカイコモウセンゴケ



写真5 トウカイコモウセンゴケの花



写真6 イシモチソウ

(たにぐち まさひと：松阪市小阿坂町4038-2)

アオマツムシの個体数は減少しているのか？

河 北 均

アオマツムシが以前は大合唱していたのに、最近、鳴き声が少なくなったという話を何人かの方から聞きました。私は既知産地の個体数が減少していると感じませんでしたので、そう言われても実感がわきませんでした。全体的にはそう減少していないように思えますし、今なお、分布を広げているようにも見えます。ただ、既知産地のなかには以前よりも個体数が少なくなっているところもあるのかもしれませんが、外来種の盛衰について、いくつか例をあげてみましょう。



アオマツムシ

アメリカシロヒトリは第2次大戦後にアメリカから米軍の物資について侵入したとされています。1980年代頃まで大発生を繰り返しましたが、その後はおさまり安定した状態のようです。殺虫剤による駆除や鳥類・寄生蜂などの天敵により減少したという説もありますが、はっきりした原因は不明です。

セイタカアワダチソウは明治時代に園芸用として導入され、第2次大戦後に爆発的に全国的に広がり、社会問題となりました。急増した原因は戦後の土地開発、農地改良などによる土壌改良及びアレロパシー作用（他感作用）といわれています。1990年代頃から減少傾向となり、ススキ群落に遷移しているところが多いようです。減少原因は刈り取りによる駆除、アワダチソウグンバイ、うどんこ病など天敵の増加といわれています。

アメリカザリガニは、1927年にアメリカからウシガエル養殖用の餌として導入されたものが野外に逃げ出して分布拡散しました。原産地のアメリカ南部にはない水田という環境が本種の生息にマッチしたのでしょうか。50歳以上の方は子供の頃にザリガニ捕りをして遊んだ経験を持つ方人も多いと思います。その頃に比べて減少していると感じませんか？田んぼには普通にいますが、昔に比べて個体数が減っているようです。あれほどウジャウジャいたというのに…。

これらの外来種に共通しているのは、大発生したあと、減少して安定期に入り、生態系のなかに組みこまれます。減少要因は環境の変化、駆除、天敵等が指摘されています。

アオマツムシは明治時代に中国から産卵された園芸木についてきたと考えられ、1898年に東京で初めて記録されました。東京、名古屋、大阪、下関、福岡など大都市に分布が限られていましたが、1980年代頃から分布が拡大しました。日本列島では樹上性コオロギ類は少なく、本種は競合する種がほとんどない空ニッチを占有して分布を広げたと考えられます。急激に分布拡散した本種は、前述した外来種同様、安定期に入ってもよさそうに思われます。私に実感はないが既にそうなりつつあるのかもしれませんが、実感のない私が個体数の減少と言っても説得力はありませんが、安定期に入ったと仮定して大発生の終焉要因について考えてみましょう。前述の外来種の盛衰から推して、次の要因が想定されます。

環境の変化、農薬等による駆除、天敵があげられます。環境の変化については考えにくいようです。本種が当初増え続けたのは、公園、街路樹、家の庭など自然環境が破壊された場所でした。環境の変化ごときで減るような昆虫ではありません。農薬等による駆除はどうでしょうか。本種はカキを加害する農業害虫です。駆除に有機リン系農薬を使用するようですが、効果の程度は分かりません。農薬

を使用するとしても果樹園に限られるため、住宅地、公園、雑木林など大部分の生息地では農薬は使用されず、全体としての影響は少ないと思われます。最後に天敵ですが、この可能性が一番高いでしょう。

アオマツムシの天敵とはなんでしょう。鳥類による捕食ですが、観察例など具体的なデータはないものの影響は大きいと思われます。本種の侵入の初期は市街地に入り、自然林への侵入は遅れます。このことは、自然林には昆虫を捕食する動物すなわち野鳥の種数、個体数が多いということを間接的に示唆しています。市街地のような捕食者のあまりいないところで生態的地位を獲得するのは容易ですが、捕食者や競合する生物が多い自然林で生態系に組み込まれるのは時間がかかります。哺乳類、爬虫類、両生類、クモ類なども捕食者となり得ますが、樹上性である本種の生息域から推して爬虫類等の影響は軽微で、野鳥の存在が大きいのではないかと思います。

次にアオマツムシだけ狙う捕食者はいないのでしょうか。アオマツムシだけ専門に狩るハチはいませんが、直翅類だけを狩るアナバチ類はおり、たいていの場合特定の種群だけ狩ります。クロアナバチはツユムシ類、ウマオイなど、コクロアナバチも同様にササキリ類、ツユムシ類、ウマオイなど獲物は多岐にわたり、キリギリス亜目なら何でもよいようです。私もアオマツムシを狩って運んでいるのを見たことがあります。目撃例がクロアナバチかコクロアナバチか同定できなかったためどこへも報告していません。法事で寺の境内だったとはいえ、採集できなかったことが悔やまれます。やはり、同定には現物が必要である。クロアナバチ類はアオマツムシ専門のハンターではありませんが、キリギリス亜目専門に狩るハチなので有力な天敵と言えるでしょう。

最後に紹介するのは寄生者です。大発生している生物にとって寄生者は脅威です。絶滅に近いダメージを受けることがあります。最近ではオオミノガが激減しています。1990年代にオオミノガヤドリバエが侵入したため、あれほどたくさんいたミノムシがみられなくなりました。アオマツムシの寄生者については、アオマツムシクロタマゴバチという1993年に新種記載された体長約2.5mmの寄生バチが記録されています(Yamagishi1993; *Jpn. J. Ent.*, 61/4)。和名のとおり、アオマツムシの卵に寄生しますが、直翅類研究者の間でも話題にあがることがほとんどないぐらい地味な昆虫です。このハチはアオマツムシの分布域で広範囲に生息していると推測されますが、これまで岐阜県と愛知県から記録されているだけです。

鈴木・桜井(2001; 岐阜大学農学部研究報告, No.66)によれば、アオマツムシクロタマゴバチはアオマツムシ卵に対して高い寄生率を示し、天敵防除に使用すれば生息密度を低減できると想定しています。アオマツムシの個体数が減少して安定期?に入ったと仮定すれば、寄生率の高いアオマツムシクロタマゴバチが発生を抑制している可能性が最も高いのではないかと思います。もっともアオマツムシクロタマゴバチは三重県未記録なので机上の空論といわれてもしかたがありませんが、オオミノガを壊滅させたオオミノガヤドリバエだって三重県から記録はないのです。記録するにも、3mmに満たないハチをどうやって探すのじゃ! ルッキングで採集しようにも眼ン玉がビノキュラーでないと無理でしょう。

アオマツムシクロタマゴバチは、在来種の本種が外来種のアオマツムシに寄主転換した可能性が高いそうですが(鈴木・桜井2001; 同上)、元の寄主については言及されていません。分類上アオマツムシに近縁で、かつ生態的地位がほぼ同じなのはマツムシモドキです。自然林に生息し、希種というほどではないがどちらかといえば少ない種です。元の寄主である可能性はあるのですが、確認は極めて困難です。

アオマツムシの個体数が実際に減少しているかどうかは実証されていませんが、もし、減少傾向であれば、第一の原因はアオマツムシクロタマゴバチの影響、次に鳥類やクロアナバチ等の捕食が考えられるでしょう。

(かわきた ひとし: 伊勢市岡本1丁目17--18)

ヨシ原で暮らす狩りの名手・ヨシゴイ

今 堀 聖 史

ヨシゴイは名前のとおりヨシ原に生息するサギで、体長35cm前後とサギ類の中で最も小さく、ハトと同じぐらいの体長です。夏鳥で、個体数が少なく見かけることは稀ですが、今年の10月11日に多気町四疋田のヨシ原で採餌する場面を観察したので紹介します。

ヨシゴイは、ヨシ原の茂みで行動することが多いため開けた水面に出てくることはめったになく、とくに明るい日中は姿を見せない薄明薄暮性と説明されることがあります。私が観察したのも曇り時々小雨の日の11時頃でした。いつもはヨシゴイを撮影しても手前にヨシの茎や葉があり、鳥の姿は背後にしか写りませんが、今回はヨシが少ない場所に出てきて採餌し、2～3分後に茂みの奥へ移動して行きました。その短時間に、水面を2mほど歩いてヨシの茎につかまって周りを警戒し、餌生物のようすを見て飛び降りて近づき、一瞬の動きで20～30cm先のエビを嘴の先でつまみました(写真1)。脚・目・首や嘴が連動するヨシゴイの柔軟で鋭い動きはベテラン漁師がヤスで魚を突く動きを連想させる狩りの名手です。

サギ類のように長い首と嘴で狩りをする鳥類の体の仕組みを「鳥の骨探」(安部・松岡2009; NTS)では次のように記しています。『鳥類は頸椎の数が種によって異なり20以上ある種もいる。哺乳類の頸椎数がほぼ7で一定なのと好対照である。さらに、前後の椎体どうしが特殊な関節構造で結ばれ、前後左右に自在に曲げることができる』。サギ類が首をすくめている時は頸椎がS字状に曲げられていて、頭と嘴はS字の先端にあります。ヨシゴイが狩りをする時は頸椎がほぼ一直線になっていると推定できますが、頸椎を自在に動かす筋肉が細く長い首の中にどのようにあるのか、嘴で小さい餌生物をつまむ力はどのように調節されているのかなど、疑問が湧いてきます。

ヨシゴイの三重県における観察例は少なく、最近の繁殖記録はありません。「三重県鳥類の分布とその生態—記録・生態写真集—」(橋本太郎1980; 自刊)では、本種について1950年代の観察6例を挙げています。また、解説では「夏鳥として渡来し、伊勢湾沿岸の各地ヨシ原に普通。熊野沿岸にも少数生息する。ヨシ原に営巣し県内ではコロニーはつくらない。近年著しく減少しているように見受けられる。」と記しています。1980年に出版された著書に「近年」と書かれているのがいつの時点かははっきりしませんが、1980年以前の解説と考えられます。1970年代にはヨシゴイの生息環境が少なくなっていたのではないかと思います。現在残っているヨシ原を渡りの季節に探してヨシゴイと出会いたいものです。



写真1 ヨシゴイがエビの一種を捕まえるまでの一連の動き

(いまほり きよふみ：津市久居小野辺町1454-30)

紀北町海野諏訪池の水辺植生の変遷

山 本 和 彦

紀北町海野の東端の海辺には、諏訪池と呼ばれる面積2 haほどの小さな海跡湖がみられます(図1)。海跡湖とは数千年の昔、海水が入り込んでいた入り江の一部が土砂の堆積によって閉ざされてできた湖で、県内では志摩半島から熊野灘沿岸部に散見されます。

私が諏訪池に行き始めたのは1980年代の終わり頃からで、湖岸には湿地が発達し、当時は水もきれいで、一緒に行った者が魚を捕るために泳いでいたほどでした。湿地にはアゼスゲ、ミズオトギリ、ミソハギ、シロバナサクラタデ等、20種ほどの湿地植物が繁茂し、水中にはマコモ、ショウブ、シログワイ、ミズハコベ、センニンモ等、20種ほどの水草が生育していました。

1998年、瀬戸剛氏(当時大阪自然史博物館)らは諏訪池の植物相調査を実施し、池とその周辺にはヒメキカシグサ、クロハリイ、ヒメシロアサザ、ツクシナルコ、チョウジソウなどの保護上重要な植物が生育していることを報告しています(紀伊長島町教育委員会 2000; 諏訪池調査報告書)。これらの中でヒメキカシグサとクロハリイは、この調査で初めて確認された植物で、ヒメキカシグサは全国でも近年生育が確認されておらず、特筆すべきたいへん稀な植物といえます(藤井ら 2012; 分類12/1)。またクロハリイは北方系の植物で、県内でも二ヶ所でしか記録されていないという貴重な植物です。ヒメシロアサザやツクシナルコ、チョウジソウも自生地が少なく、絶滅のおそれのある稀な湿地植物です。

このように諏訪池は、水草や湿地植物が豊かなところでしたが、2000年頃からカワウの集団が池周囲のヒノキ林に住みつくようになると、池の様子が一変してしまいました。ヒノキ林はカワウの排泄物で真っ白になり、2002年に訪れた時には湖水は富栄養化し、緑色になっていました。2008年には悪臭とアオコの発生が認められ(藤井ら 同上)、富栄養化の進行とともに水草類は衰退しだし、2011年



図1 諏訪池位置図



写真1 消失した水草と湖岸の湿地植物。岸边にはシカ足跡が目立つ(2011年5月4日)。



写真2 21年前の湖岸景観。水中にはヒメガマ、マコモ等の水草が、湖岸には湿地性植物が茂る(1998年5月11日)。

頃になると大部分の水草が消失していました（写真1）。ヒメシロアサザは、1900年代後半までは湖面に葉を広げ、繁茂していましたが、2004年頃には衰退し、ほとんど見られなくなり、2011年には完全に消失していました（市川正人氏私信）。

さらに、他地域と同様、諏訪池でもシカによる食害が激しくなり、湖岸湿地を覆っていたアゼスゲやセリ、さらに希少種のクロハリイやツクシナルコなども姿を消しています（写真1，2）。有毒植物でシカの食害を免れていたチョウジソウも最近では採食されだしています。その結果、現在湖岸で見られる大型の草本は、シカの不嗜好植物であるヤナギタデのみとなってしまいました（写真3）。

一方、ヒメキカシグサなど背丈の低い湿地植物は、シカの食害をそれほど受けておらず、今のところ健在です。また、水草のセキショウモやヒメホタルイは、環境の変化に対して耐性があるようで、十分な個体数を維持しています。

諏訪池の植生は、ここ20年の間でカワウとシカにより大きく変化しました。20年前、今のような植生に変遷するとは想像もできませんでした。今回過去の写真や野帳を探しながら、改めて記録しておくことの大事さを知った次第です。



写真3 最近の秋の水辺景観。シカの不嗜好植物であるヤナギタデが群生（2011年10月7日）。

（やまもと かずひこ：尾鷲市小川西町8-40）

事務局から

○会費納入を御願います。

振込用紙を同封しましたので支払い状況を確認ください。

○三県合同フィールドワークのご案内

三重・奈良・和歌山三県の持ち回りで実施しているフィールドワーク・交流会です。今年は三重県の当番年で、6月13-14日（土・日）の日程で鳥羽市答志島・菅島を予定しています。次号で詳細を案内いたしますのでご予約下さい。

○鈴鹿青少年の森湿地の保全活動

毎年恒例の除草作業です。1月30日（木）午後1時から2時間程度行います。

参加希望の方は090-9262-4665（清水）までご連絡下さい。

編集後記

冬の訪れが遅いようで、11月末になっても庭のハマボウは紅葉中で、八重田池にもカモ類があまり飛来していません。今年の冬はどんな案配になるのでしょうか。冬号は3月発行予定ですので、ご投稿をお待ちしています（善）。

自然誌だより122号 Mie Natural History Research Group News No.122

発行日 2019年12月13日

事務局 〒515-0835 松阪市日丘町1386-17

清水善吉方 三重自然誌の会

<http://www.zb.ztv.ne.jp/mie-shizenshi>

発行者 三重自然誌の会

郵便振替口座 00800-5-17842 三重自然誌の会

年会費 1,500円（個人）/2,000円（家族）

e-mail: mie-shizenshi@zb.ztv.ne.jp